

教育学部学校教育教員養成における 授業科目「小学校教科〈国語〉」に関する実践的研究[†]

澤崎 文*・鈴木 啓子*・守安 敏久*・中島 宗皓(望)**
宇都宮大学教育学部*
宇都宮大学地域デザイン科学部**

宇都宮大学教育学部教育実践紀要 第4号 別刷

2018年2月28日

教育学部学校教育教員養成における 授業科目「小学校教科〈国語〉」に関する実践的研究[†]

澤崎 文*・鈴木 啓子*・守安 敏久*・中島 宗皓(望)**

宇都宮大学教育学部*

宇都宮大学地域デザイン科学部**

宇都宮大学教育学部 学校教育教員養成課程における授業科目「小学校教科〈国語〉」について、平成28年度後期の授業実践を報告・考察する。この授業は、書写・国文学・国語学・国語国文学のオムニバス形式(4教員体制)で開設した。それぞれの領域における授業の様子、学生の反応、意見や評価などを振り返りながら、授業実践の意義と課題を研究報告する。

キーワード：小学校教科、国語、書写

宇都宮大学教育学部 学校教育教員養成課程では、学部専門教育科目として「小学校教科〈国語〉」(1単位)を開講している。これは小学校教員免許を取得するための免許法指定科目「国語(書写を含む)」に対応する必修科目(主として1年生対象)として位置づけられている。

本稿では、平成28年度後期に開講された授業科目「小学校教科〈国語〉」(受講者数91名)を事例として、その授業実践を報告・考察する。

授業科目「小学校教科〈国語〉」は、「国語」という教科の特色・意義を、「書写」「国語学」「国文学」などの専門領域を通して学び、小学校で「国語」を教える際に必要な態度・知識・技能を修得することを目的とした授業である。総論及び書写3回(中島宗皓(望))、国文学4回(守安敏久)、国語学4回(澤崎文)、国語国文学4回(鈴木啓子)の計15回のオムニバス形式(4教員体制)で開設した。なお国語国文学のうち1回は、実地指導講師を招聘し、小学校の国語教材に即した授

業を行った。それぞれの学問領域の専門性に基づき、教育現場に対応した事例・教材の提示・解説を行い、小学校で国語を教える際に必要な、書写・日本語・日本文学に関する基礎的知識、文学的教材を扱う際の基礎的技能について具体的に講義した。

15回の授業構成は以下の通りである。

- 第1回 総論－ガイダンス：国語科の指導と目的
- 第2回 書写①－国語のなかの書写
- 第3回 書写②－書写の指導と目的
- 第4回 国文学①－夏目漱石の人と文学
- 第5回 国文学②－夏目漱石の思想
- 第6回 国文学③－正岡子規の短歌
- 第7回 国文学④－高浜虚子の俳句
- 第8回 国語学①－ことばの働きと特徴
- 第9回 国語学②－古典文学のことば
- 第10回 国語学③－辞書のことば
- 第11回 国語学④－ことばの表記
- 第12回 国語国文学①－文学的教材の特質と意義
- 第13回 国語国文学②－小説・童話の読解方法(1)
- 第14回 国語国文学③－小説・童話の読解方法(2)
- 第15回 国語国文学④－小学校文学教材の授業方法

宇都宮大学では、学期末に「学生による授業評価」を実施しているが、この授業に関しては、「総合的に判断し、この授業は有意義であったか」という質問に対して、5段階評価で、4.15評価を得ており、「オムニバス形式だと、さまざまな先生方の意見に触れられて勉強になります」という学生の自由記述評価があった。以下、領域ごとに、その実践的な研究報告を記す。

[†] Fumi SAWAZAKI* and Keiko SUZUKI* and Toshihisa MORIYASU* and So'ko' (Nozomu) NAKAJIMA**: A Practical Study of a Lesson "Elementary School Lesson 'Japanese'" in School Teacher Training Course, School of Education

Keywords: Elementary School Lesson, Japanese, Transcribe

* School of Education, Utsunomiya University

** School of Regional Design, Utsunomiya University
(連絡先: t-moriya@cc.utsunomiya-u.ac.jp 守安敏久)

【書写領域】

文字を毛筆で学ぶ意義と目的があらためて問われている。文字は毛筆によって発展してきた歴史があり、毛筆によって生じた、「はね・はらい・とめ・ぬく」といった部分は、鉛筆など硬筆で書く文字にも大切なルールとなっている。

また今後、低学年にも毛筆による学習が導入されるが、もとより書写の時間は文字を毛筆で巧みに書くことを目標にしているのではない。

それでは、なぜ毛筆で学ぶのか。その意義と目的は、毛筆由来のルールを確かめるためであり、理解を深めるための道具として毛筆を用いているのである。

ところが、現場ではこのことへの認識が未だ浅く、その多くは美術的な捉え方をもって、写生画と同様に教室内に掲示して観賞するものと解している。また、その評価には子供らしさや個性を取り上げることが多い。さらには、書き初め大会への出品や書塾単位で出される等級制度が少なからず弊害となり、旧態依然とした習字教育が行われている。

本学「国語」の授業では、これまでの書写指導を振り返り、子どもたちが国語を学ぶうえで、書写はどのような位置にあるのか、あるいは芸術科書道との教育目標の比較を通して、藝術そのものへの解釈にも言及するが、たとえば高等学校芸術科にあっても、音楽や美術といった分野の専門性は伝えられても、本体の藝術の解釈まで考察することは極めて少ないのである。

もとより書写は、言葉の正しさを伝える国語にあって、文字の正しさを伝える学習である。あえて言葉の問題を挙げれば、本来的にも文頭の接続詞として使うべきではない「なので」が近年ますます定着しつつある。とはいえ、これまでの「ですから」や「ですので」が歴史的に正しいかといえばさらに説明を要するが、言葉が生き物であるとはいえ、国語は特に正しさを伝える教科であり、常に日本文化と連動してきたため、こうした現象には常に敏感になっておく必要はあり、授業ではこうした問題にもたびたび触れている。

なお、担当者は書写以外に国語教育全般について、特に指導要領の解説を行っている。国語の分野ごとの目標を明確にするため、それぞれの教材を示しながら、今日的課題を整理している。なかでも作文教育の重要性や、黙読や朗読に加え、近年注目されつつある群読について取り挙げ、国語教育の目指すところの、「言葉(心)を届ける学習活動」には特に時間を割いている。

その他、教育機器の話題にも触れ、クリッカーを

はじめ、視聴覚機器の活用についての紹介もするが、映像教材にばかり頼れば、物事を文章化する力は低下することに警鐘を鳴らしている。授業計画(シミュレーション)を課せば、視聴者参加型のテレビ番組のような内容が稀に見られる。

最後に、国語科書写の学習について、その教育方法を学ぶ「国語」にあって、やがて学生は、この僅か1単位で教壇に立つことになる。そのため、選択科目となる「書写」の履修を強く勧めているが、すべての教育活動を通じて国語力を育成することが必要とされる現場で、子どもたちは様々な場面で、言葉を基盤とした思考力、判断力、表現力を育む。国語教育の本質をいかに伝えてゆくかが常なる課題である。

【国文学領域】

近代日本文学史における最高の知性のひとは、疑いなく夏目漱石である。夏目漱石の思想と表現に学ぶことは、「言葉」の豊かな深奥に向き合う姿勢を鍛えてくれるであろう。

この授業での国文学領域は、まず夏目漱石の人と作品について略述した後、明治44年8月に漱石が和歌山で行った名講演「現代日本の開化」に耳を傾けることから始めた。さらに漱石の大親友であり、短歌革新運動を推進していった正岡子規の短歌と短歌論について学ぶと共に、学生自ら短歌作りを試みてもらった。また正岡子規の俳句の弟子である高浜虚子について、その俳句と俳句論を学びながら、学生たちは続いて俳句作りを試みることになる。このように夏目漱石に関連する4回分の授業で、近代と格闘した優れた文学作品にふれることで、「国語」を教えるにふさわしい論理的な読解力と表現力の育成に努めるべく、授業構成していった。

夏目漱石の講演「現代日本の開化」(『朝日講演集』、朝日新聞合資会社、明治44年)は、文明開化の時代を生きた漱石自身が、その開化が孕むパラドックス(逆説)に向き合った鋭い文明論として名高い。漱石は開化を考えるに当たって、「開化は人間活力の発現の経路である」と定義することから思考を始め、開化に依じて、人々の生活は楽になったか、という問題提起を差出す。開化が進めば進むほど、逆に競争がますます激しくなり、生活はいよいよ困難になっている。生存競争から生ずる不安や努力に至ってはけっして昔より楽になってはいない。労力節減の時代、娯楽拡大の時代にあつて、生存の苦痛は痛切であり、開化が産んだ一

大パラドックスとなっていると、漱石は説く。さらに漱石は、西洋の開化は内発的であるが現代日本の開化は外発的であるとして、外発的な開化には空虚感があることを指摘する。しかし皮相上滑りの開化であると理解しつつも、涙を吞んで上滑りに滑っていかなければならない悲観論を語っている。

この授業では、この漱石の講演「現代日本の開化」について、学生に考察レポートを課した。携帯電話やインターネットといった高度な情報手段に囲まれ、「平成の開化」を生きる学生たちのなかには、百年前に漱石が指摘した「開化のパラドックス」が、現在もあてはまるという者もいれば、外発的な開化に悲観的な漱石に反論する者もいた。

正岡子規については、当代歌人の和歌観の狭隘を批判し、和歌を広く「文学」として位置づける巨視的な歌論「三たび歌よみに与ふる書」(『日本』明治31年2月)をまず読解した。短歌とは何かについての理解を深めた後、さらに子規の短歌作品の数々を鑑賞した。続いて学生たちが自由に短歌を作る時間を設けた。とりあえず七七五七七の定型に拠りつつ、「家族」というテーマで作歌してみるよう促した。苦吟してなかなか作歌できない者がいるかと思うと、いくつも次々作り出していく者など、個人差は見られた。その後、学生同士で作った短歌を相互批評させた後、いくつかの作品を発表させ、全員で鑑賞共有した。

高浜虚子は主宰する俳誌『ホトトギス』に漱石『吾輩は猫である』を掲載し、作家・漱石誕生の産婆役ともなった。季題と十七字定型の伝統擁護を唱えた虚子の俳句論「花鳥諷詠」(『虚子句集』序、春秋社、昭和3年)を読解した後、虚子の俳句作品の数々を鑑賞した。さらに「秋」を季題に学生たちには俳句作りをしてもらい、短歌のときと同様に、相互で鑑賞共有した。

この4回分の授業を振り返ってみると、夏目漱石をめぐる講義形式が軸となったため、やや単調に傾いた嫌いがあるが、短歌作り・俳句作りの時間は苦労しながらも興味深く取り組んでいる様子が伝わってきた。

【国語学領域】

昨2016年2月29日に、文化審議会国語分科会から「常用漢字表の字体・字形に関する指針(報告)」(以下「指針」)が出され、話題となった。現行の「常用漢字表」(平成22年内閣告示第2号)の「(付)字体についての解説」に沿って、手書き文字の字形と印刷文字の字形に関して説明するものである。特に、手書き文

字の楷書にはいろいろな書き方があり、例えば「木」の縦画の終筆は止める書き方とはねる書き方の両方があるがどちらか一方だけが正しいと考えられるべきではない、と説明する内容になっている。これはすでに昭和24年内閣告示第1号「当用漢字字体表」の「まえがき」から述べられてきた考え方ではあったが、教育の場面や一般社会では必ずしもそれが理解されずに漢字字体・字形の把握がおこなわれてきた実態があった。これを受けて、その改善をはかる意図で示されたのが先の「指針」である。この「指針」の考え方は、教壇に立ち漢字教育に携わる者にとって必須の知識であると思われる。教育学部の全学生に必修である「小学校教科(国語)」の科目こそこれを扱うにふさわしい場であると考え、「国語学①ことばの働きと特徴」では、次のような授業をおこなった。

まず、受講生自身の漢字字体・字形に関する意識に自覚的になってもらうという意図を込めて、実際の手書き文字を1字体に対し2例ずつ示し、これらの手書き文字のどちらが正しいと思うか、もしくはどちらも正しい、どちらも正しくないと思うかについてアンケートをおこなった。このアンケートの内容は、平成26年度「国語に関する世論調査」の「字体・字形の違いに対する感じ方」(問17)で扱われたものと同じであり、先述の「木」の例を含んでいる。アンケートの結果をその場で共有し、受講者の回答と「国語に関する世論調査」で得られた全国的な回答とがおおむね傾向として一致することを確認した。

つづいて「指針」の考え方について説明し、アンケートで示した手書き文字はすべて適切な書き方であり、どちらかだけが正しいとされるものではないことを確認した。さらに、どちらか一方だけが正しいと考える人が現に多数であることによって、各種試験等における、漢字の書き取り問題の評価や、戸籍等に関する官公庁の業務において、現実に支障が生じうることを問題意識として共有した。

現行の「小学校学習指導要領解説 国語編」(平成20年6月 文部科学省)でも、「学年別漢字配当表」に示された漢字の字体は「標準」であって「これ以外を誤りとするものではない。」と述べられているが、漢字学習のごく初期段階にある児童に教える際には、唯一無二の「正しい答え」がなく、「どちらでもよい」ことを指導するのは難しい場合がある。そのような場合は必ずしも「指針」の考えを徹底させるのではなく、指導の場面や状況に応じた配慮や

工夫があってよいはずである。講義の最後には、どのような漢字指導や試験のあり方が望ましいと考えるかについて、受講者同士での討議をおこなった。そこで出た意見を教室全体で共有したところ、「初めに指導する際には手本となるひとつの字の形を教え、試験の際にそれとは異なるが適切と見なされる範囲の形で書いてくる児童がいた場合には、個別にこれも正しいということを伝えたい。」「試験の際にも、丁寧な字を書くべきであるから、指導した形で書かなければならないことを事前に伝えたい。」など、様々に具体的な意見が出された。

受講生に「指針」の考え方を理解させ、実際の指導における留意点を意識させるという面では、本授業の目的は達成されたと言えよう。「指針」が出されてから一年半。今後は現場の声を拾いつつ、より場面に則した現実的な指導のあり方を考えることが課題となる。

【国語・国文学領域】

鈴木を担当する4回の授業では、「文学的教材」を扱う際の思考スタイルを、理論的かつ実践的に伝授することを目的としている。学生に最も修得させたいことは、文学的教材とは、読者の能動的で創造的なアプローチによって、はじめて文学テキストとして豊かに立ちあがるということである。表現の一義的な意味や物語の筋を追うだけでは、文学的教材の面白さを捉えることはできない。しかし、受験国語を通過してきた学生は、叙述の表層の意味のみを素早く把握して、「正解」に辿り着こうとする傾向がないわけではない。この誤解を打ち破ることが授業の最大の目的である。

平成28年度は、安岡章太郎の掌編『サアカスの馬』を教材に用いた。戦前の旧制中学が舞台であり、作者自身が劣等生の「ヤスオカ」少年として登場する、所謂「私小説」である。思春期の少年は、人格形成期にある大学生1年生にも感情移入し易く、大人（語り手や教師）の視線で読むことにより、学校教員養成課程の学生の興味を惹きつける物語内容となっている。また、一人称回想体は、日本近代文学に最も多用される小説スタイルであり、この読み方のコツを伝授することは今後の読書や将来の教材研究に資する点も多い。

授業は、作品末尾の2センテンスの一部を油性マジックで黒く塗りつぶしたテキストを配布して行う。「音読」「黙読」の差異とそれぞれの効能を説明したのち、鈴木自身が音読する。文学作品は、音読のスピードで登場人物の身体的イメージ（声・身体・性格）を膨ら

ませて読むことが如何に大切かを体験的に学んでもらいたいからである。作品空間が受講生の脳裏に十分に広がったことを確認したのち、塗りつぶした箇所に入る文章を自由に作文してもらおう。これが見事に別れる。「明るい気持ちになった」「一生懸命手を叩いた」等の明るい結末を書く者が約40名、「絶望した」「まあどうだっていいやと呟いた」等の暗い結末を予想する学生が約40名。10数名はどちらとも決めきれない結末を書く。受講者は、ごく自然だと感じる結末が読者によって大きく異なることに驚く。教室が響めき活気づく。なぜ違うのか。それは「解釈」「読み」が異なるからである。いったい自分はどう読んでいるのか。これを、自己分析させていく。読みの分析は、あくまでも作品の叙述にそって行わねばならない。そのために、主人公の少年と語り手をどのようにイメージしているか、コメント用紙（A6）にできるだけ詳細に書いてもらう。巧い文章で書く必要はない。実感にそった言葉を探させる。美術専攻の学生には、人物イメージをイラストにして描く者もいる。翌週、20名ほどのコメントを切貼コピーして配布する。模範的な回答のみを取りあげるわけではない。意外な意見、言葉足らずなコメントを採りあげ、そこから作品の読みを深めていく。文学作品を読むとは、筋を追うことではなく、また一つの主題にたどり着くことでもない。解釈を多角的・対話的に深めていくこと、その終わりのない探究こそが面白さであることを伝えられたら、ひとまず目標は達成されたと考えている。

「はじめて文学が面白いと思った」「感想がここまで論理的に説明されるとは思わなかった」という感想もあれば、「僕は、正解が無いのは耐えられない」と悲鳴をあげる学生もいる。心に響けば本望である。

3回目は、附属小学校の皆川美弥子教諭に、研究授業を器機で映写しつつ、小学校文学教材の授業実践をご講義いただいた。心をワクワクとさせる工夫が随所になされており、学生への感化は計りしれない。

最終回は、4回の授業を振り返りつつ、文学的教材を扱う際に大切なことを概説的にまとめ、1週間後をメ切に設定して、A41枚のレポートを課した。ぎっしりと裏まで書かれたレポートには毎年驚かざるを得ない。28年度後期は、一括クラス化の影響であろうか、専攻する教科の別をこえて、読み応えのあるレポートが数多くみられた。希望者にはメールを用いて、個別にコメントを行った。

平成29年9月26日 受理

**A Practical Study of a Lesson
“Elementary School Lesson ‘Japanese’ ”
in School Teacher Training Course, School of Education**

**Fumi SAWAZAKI* and Keiko SUZUKI* and Toshihisa MORIYASU*and
So'ko' (Nozomu) NAKAJIMA****

* School of Education, Utsunomiya University

** School of Regional Design, Utsunomiya University